

修士論文（要旨）

2019 年 1 月

運動経験における共同体感覚の影響要因の検討
ー社会的自己制御との関連についてー

指導 石川 利江 教授

心理学研究科
健康心理学専攻

217J4055

永峰 大輝

Master's Thesis(Abstract)

January 2019

An Investigation of Factors Influencing on Social Interest in Past Sports Experiences
: In Relationship to Social Self-Regulation

Daiki Nagamine

217J4055

Master's Program in Health Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Rie Ishikawa

目次

はじめに	1
第1章 問題と目的	2
第1節 共同体感覚	2
第2節 社会的自己制御	3
第3節 スポーツチームにおけるコミュニケーション	4
第4節 目的	5
第2章 研究1「運動経験と共同体感覚および社会的自己制御の関連」	7
第1節 目的	7
第2節 方法	8
第3節 結果	9
第4節 考察	15
第3章 研究2「運動経験における共同体感覚の影響要因の検討」	19
第1節 目的と仮説	19
第2節 方法	19
第3節 結果	20
第4節 考察	25
第4章 総合考察	27

謝辞

文献

資料

要旨

第1章 問題と目的

近年では、社会の急激な変化から様々な背景を持つ人々が共に生きる時代となり、他者と良好な関係を保つためにコミュニケーションスキルの重要性が指摘されている。対人関係や社会適応に必要な概念として、共同体感覚がある。Crandall (1981) によって“他者に対する興味関心”と定義され、測定尺度も作成されている (Greever, Tseng, & Friedland, 1973 ; Sulliman, 1973) が、共同体感覚の影響要因については研究がされていない。

これまでの多くのコミュニケーション研究で、自己主張・自己抑制が重要とされている。以上の2つをまとめた概念である社会的自己制御 (以下 SSR) (原田・吉澤・吉田, 2008) について、他国に比べて低いことが指摘されている (原田・吉澤・朴・中島・尾関・吉田, 2014)。新しい概念であるため、先行研究も少なく今後検討していく必要がある。

運動を行う上でも、他者の存在がなくては成り立たない。週1日以上スポーツ実施率が高まっている (スポーツ庁, 2018) ことから、近年スポーツに対する社会からの要請は増大していると考えられる。スポーツの醍醐味である人同士の駆け引きや一体感は、個人の健康に対し大いに貢献できるものであるといえる。本研究では、共同体感覚の影響要因として、SSR とスポーツチームの一体感について検討した。

第2章 研究1「運動経験と共同体感覚および社会的自己制御の関連」

第3章 研究2「運動経験における共同体感覚の影響要因の検討」

研究1では、運動部活動所属の有無における共同体感覚と SSR の差についての検討と、共同体感覚の影響要因としての SSR について検討した。研究2では、運動部活動において SSR が直接および一体感を媒介して共同体感覚に影響を与えるかについて検討した。

2つの研究から、SSR における自己主張と感情・欲求抑制が、共同体感覚の所属感・信頼感と貢献感に正の影響を与えることが明らかになった。また、運動部活動において一体感における集団への統合を媒介して正の影響を与えることも示された。集団のメンバー間のコミュニケーションが、メンバー間の最適な関係に影響すること (Cotterill, 2012)、日本人のコミュニケーションが相互の一体感を得るために行われていること (大野, 2002)、一体感を高めることがメンバーの相互作用を強めること (Woodcock, 1994) が報告されていることから、本研究においても同様な結果が得られた。共同体感覚の理論においては、(Adler, 1930/岸見訳, 1996) 人は弱ると共同体感覚を持つのをやめ、個人的優越性を追求するとされているが、本研究では苦悩を味わう場面が多いスポーツの視点で検討を行ってきた。つまり、人はネガティブな状況に置かれた場合、共同体感覚が高い人ほど目標を自己実現に関するものへと方向付けやすいのではないだろうか。目標が他ではなく自己に向かうことで、優劣という他者の存在を意識することなくスポーツに打ち込めるようになる。その結果、精神的健康などに関わってくる可能性も大にあるだろう。

第4章 総合考察

今後の展望として、共同体感覚は社会適応 (Leak, 2004) や精神的健康 (Lundin, 1989 / 前田訳, 1998) との関連も指摘されている。本研究の結果から、SSR のようなコミュニケーションスキルが共同体感覚を媒介し、社会適応や精神的健康に影響することについても検討する必要がある。また、SST などを行うことによる共同体感覚への影響といったような質的研究により、プログラム開発等のさらなる研究の発展が望まれる。

参考文献

- Adler, A. (1930). *The Science of Living*. London : George Allen And Unwim Limited.
- (岸見一郎 (1996). 個人心理学講義——生きることの科学—— 一光社)
- Crandall, J. E. (1981). *Theory and measurement of social interest: Empirical tests of Alfred Adler's concept*. New York: Columbia University Press.
- Greever, K. B., Tseng, M. S., & Friedland, B. U. (1973). Development of the Social Interest Index. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 41, 454-458.
- 原田知佳・吉澤寛之・朴 賢晶・中島 誠・尾関美喜・吉田俊和 (2014). 日・韓・中・米における社会的自己制御と逸脱行為との関係. パーソナリティ研究, 22 (3), 273-276.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御(Social Self-Regulation)尺度の作成——妥当性の検討及び行動抑制／行動接近システム・実行注意制御との関連——. パーソナリティ研究, 17 (1), 82-94.
- Leak, G. (2004). Clarification of the link between socially desirable responding and the social interest index. *Journal of Individual Psychology*, 60, 94-99.
- Lundin, R. W. (1989). Alfred Adler's basic concepts and implications. Muncie: Routledge
- (前田憲一 (訳) (1998). アドラー心理学入門 一光社)
- Sulliman, J. R. (1973). The development of a scale for the measurement of "social interest". *Dissertation Abstracts International*, 2914-B.
- スポーツ庁 (2018). 平成 29 年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」. http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/30/02/__icsFiles/afieldfile/2018/05/02/1401751_01.pdf (2019 年 1 月 7 日閲覧)